

■学校経営のポイント

小中一貫教育の課題と展望

小島 宏

中1ギャップなどが発端となり、小中一貫教育の推進が大きな流れになっている。その先導的試行の成果と課題を整理し、そこから未来志向で、多くの事柄を学び取っていききたい。

小中一貫教育のねらいの再確認

この教育のねらいは、大まかに「小・中学校の接続の円滑化(中1ギャップ=不登校等の諸問題への効果的対応)」「小・中学生の触れ合いを通して、中学生(上級生)としての自覚及び自尊感情を醸成し、暴力行為、不登校、いじめ等の解消」「教育課程を一貫性のあるものにして系統性を担保し、質の高い教育(質の高い学力)を保障」「小・中学校の学習指導や生徒指導、教材開発等の協働的・効果的推進と教職員の資質向上」「また、地域によっては複式学級解消・小規模校解消」などと、整理できる。

これまでの試行・実践の成果

各種・各学校の報告書を俯瞰すると、小中一貫教育の主な成果として「中学生の不登校出現率が低下した(中1ギャップの解消)」「小・中学生の交流により自尊感情が高まり、規範意識も向上し、暴力行為やいじめ等も減った」「国及び県独自の学力・学習状況調査の結果(学力及び学習意欲など)が向上した」「小・中学校の教職員の協働が進み、研修意欲が高まり、児童生徒理解が深まり、授業改善が進んだ」などをあげることができる。今後、これらの成果を一層広げ高めるための取り組みが求められる。

見えてきた課題

一方、小・中学校が「仲の良い同居人」から抜け出せず、年間何回かの相互授業参観、児童会と生徒会の交流程度にとどまっている状況も見受けられる。

そこで、浮かび上がってきた課題は「小中一貫した教育課程の編成に至らず、その場しのぎの調整にな

りがちである」「教職員の意識の共有化が進まず実質的な一貫教育にならない」「学校運営が独立しているため、一貫校としての統一性が薄い」「分離型のため授業相互乗り入れ、校内研究・研修、諸会議の時間調整が困難である」「一部の校務分掌担当者や教員の負担が増加する」「保護者・PTA、地域の理解・協力に温度差がある」などである。

これらの課題の克服策を関係小・中学校が策定するだけでなく、教育委員会が人事、施設・設備、予算をはじめ具体的な指導・支援をしていく必要がある。

小中一貫教育を進化させる視点

今後、児童生徒に質の高い教育を保障できる小中一貫教育にするためには、関連学校の校長の共通理解とリーダーシップの下、教職員や保護者・地域をチーム学校としてまとめ、「これまでの成果は一層高め」「課題は原因を究明して解決し」「必要なことは新規導入して」進化させる行動が必要となる。

その際、「第1に学校経営の基本方針の共通理解と一貫性及び校務分掌の組織・運営の一貫性、第2に一貫性のある教育課程の編成、実施、評価、改善のサイクル(カリキュラム・マネジメント)の実施、高めたい学力の中身やALなど学び方、指導方法、指導と評価の一体化等の共通理解と授業改善、第3に一貫性のある生徒指導(生活規律、規範意識、いじめ)、学習ルール、人間関係の指導、第4に一貫性のある学校の情報公開、保護者・地域等との連携・協力の在り方、第5に一貫性を貫きつつ9年間の義務教育の区分(63、522、432、45など)の工夫」等の視点からの検討が考えられる。

なお、以上は、全ての小・中学校が、児童生徒に質の高い教育を保障するために、小中一貫教育を意識して取り組むべき課題と検討の視点でもある。

(こじま・ひろし=元公立小学校長・(公財)豊島修練会理事長)

●校長・教頭のための手帳。月別仕事のポイント掲載。新年度対応!

2016 スクール・マネジメント・ノート

【監修】小島宏 【企画・製作】教育開発研究所 A5判・296頁/定価(本体2,200円)+税

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> をご利用ください。

